

## 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470201415		
法人名	株式会社 四季の郷		
事業所名	グループホーム富田		
所在地	三重県四日市市東茂福町4番4号		
自己評価作成日	令和 4年 7月 4日	評価結果市町提出日	

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaizokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&amp;JigvosvoCd=2470201415-00&amp;ServiceCd=320">https://www.kaizokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&amp;JigvosvoCd=2470201415-00&amp;ServiceCd=320</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和 4年 7月 12日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・開かれた施設運用に努めて入居者家族との対話を重視して来訪を歓迎している。</li> <li>・季節を感じさせるものを「特別食」「特別デザート」「特別湯」等に取り入れ提供し食を楽しむ工夫をしている。また、食事イベントにも力を入れており、定期的にバイキング形式で「おぼんざい」「パンの日」「イタリアンの日」「中華の日」等を開催している。</li> <li>・毎週、デイサービス利用者や羽津グループホーム入居者との交流の日を作り、潮彩デイサービスや羽津グループホームに出かけたりして「特別食」「お誕生日会」を一緒に行うなど、同法人内での利用者同士の触れ合いの機会を設けている。</li> <li>・外出の日を設け、利用者に季節を感じてもらっている。</li> </ul>
--

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>JR富田浜駅から徒歩5分の有料老人ホーム併設の事業所である。近くに系列の羽津グループホーム、潮彩デイサービスがあり、利用者・職員との交流がある。管理者・職員はタブレットを使用し、利用者の情報を共有している。利用者は、食を重視した季節感のある特別昼食や特別デザートを楽しんでいる。協力医・法人の看護師と職員と連携が取れており、利用者と家族は健康管理や医療面で安心である。自治会長・民生委員・医師・看護師・市介護保険課・地域包括支援センター等の関係者や利用者家族の理解と協力により、家庭的な雰囲気の中で利用者が豊かで安心して生活できる事業所を目指して支援をしている。</p>
--

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域の方々のニーズに応えるべく近隣医療機関との連携を強化、地域に貢献出来る施設を目指し、ご利用者の主体性とご家族の要望を受け入れて「自分らしい生活」を出来る施設運営を実践。	理念は玄関に掲示、毎日唱和している。管理者・職員は理念を共有し、利用者に寄り添い、温かで家庭的な雰囲気大切にしながら支援をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域ボランティア団体のイベント活動を受け入れ、また、地域交流サロンへのスタッフの参加を通して地域への親交を深めている。地域の防災訓練に参加し、講師として怪我人の接し方や移譲方法について講習している。(コロナ禍により自粛中)	コロナ禍で地域との交流はできなくなっているが、富田中学校の防災訓練に参加し、車いすへの移乗方法、介護ベットの取り扱いについて説明をした。現在、事業内での地域交流サロンについて企画中である。	コロナ禍で厳しい状況にあるが、自治会長・民生委員や老人会長と協議し、地域交流事業についての検討が望まれる。また、事業主催のイベントや行事、地域交流サロンの開催を期待する。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎月『いすず会たより』を配布し、認知症の方の生活の情報提供を掲載している。また、ホームページにより活動内容を紹介している。地域の方の認知症に対する相談に快く応じている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍により、文書での報告を運営推進会議の代わりとしている。質問・意見交換欄を設け、その意見をサービスの向上に活かしている。	コロナ禍で運営推進会議は開催を中止している。自治会長・民生委員・老人クラブ・市介護保険課・地域包括支援センター・在宅介護支援センターと利用者家族全員に運営会議の議事録を送付、返信用封筒を同封し意見を聞くようにしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	行政とは常に連携をとるよう努め、相談等、透明性をもち協力関係を築き、積極的に活動に参加し連携を密にしている。感染症対策や危機管理について、相談し意見交換している。	運営推進会議の議事録を送付した折に、市介護保険課・地域包括支援センターからの返信に意見や提案等が記載してある。疑問点があれば常に電話で質問する等相談や意交換をしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員会を設置し、2か月に一回委員会を開き個々のケース毎に徹底した議論を行い、利用者の尊厳ある関わりを見出している。「拘束をしない施設」の意識を徹底し、致し方ない時は家族の同意を求め、記録をきちんと採っている。	身体拘束委員会を2か月に1回開催をしている。身体拘束適正化指針のマニュアルを活用し、職員研修を実施し身体拘束のないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止をテーマに社内研修を実施している。社内ミーティングにおいて虐待につながる行為がないか検討することで、虐待防止に努めている。また、利用者の立場に立った接し方をすよう心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	必要情報の入手・展開を図り、内部研修により制度について教育・訓練を実施し、自己啓発の場を提供している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所時は診療情報提供書、面接により判定会議を行い検討している。料金の内訳は契約時に十分説明し、資料を渡し了解を得ている。退去する際には利用者やご家族に十分な説明を行い過程・決定が明確である。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	相談苦情の対応をきめ細かくするため、内容と対応をシートに記入、検証している。また、家族とのコミュニケーションを重要視し、面会時には近況報告し意見を聞かせてもらい、程よい距離感を保てるよう努めている。	コロナ禍で面会を制限している。毎月発行のいすず会だより・スナップ写真・近況報告等を送付している。また、家族との電話で意見や要望を聞いている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会議と、月に2回の管理者会議に議題を提供し意見を集約し、ご利用者にとってよい施設サービスが提供できる様になっている。	管理者と職員はコミュニケーションが大変よく、気軽に会話が出来る環境にある。毎月開催の職員会議や日常会話で職員の意見や要望、提案を聞いて事業運営に活かしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年1回、それぞれの部署で個人面談を実施し、能力の開発に努めている。自己評価・人事評価を実施し、能力実績を昇給などに反映して意識向上につなげている。また、労働条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	採用時には新人研修を実施し業務の理解を図る。内部研修を毎月テーマを決めて実施すると共に、その都度必要時、テーマを設け実施してレポートを提出し職員の専門性向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	行政の主催するネットワーク会議など積極的に参加し、情報を得る事により他の改善へと努力している。また、北包括が主催する研修には積極的に参加している。研修は勤務評定に反映する仕組みとなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居希望者にはショートステイの活用や現場見学を通して、話を聴く機会を設けている。その際、本人や家族のニーズなどを知るように努め職員同士で共有している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設側から積極的に連絡を行う等、ご家族が話しやすい環境作りを心がけると共に、話を聴く機会を十分に設け、ご家族の意向を親身に受け止めるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前の本人・家族面談やケアマネとの連携の中で、適切な危機管理をふまえた支援ができるよう努めている。その利用者の人柄にあったメンタルクリニックを紹介して、問題点の解決に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	礼節を重んじながら親近感のある雰囲気の中で過ごし、毎日の生活の場の中で横のつながりを意識した関係を作っている。認知症の進行により日常会話も困難なこともあり、出来る事は共に行い、信頼関係を保てるように心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍により、対面での面会ができない中、LINEビデオ通話やガラス越しでの面会を行っている。時には本人・家族の中に職員が入り、共に支えていく関係づくりに取り組んでいる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	居室内には今まで使用してきた馴染みの家具を持ってきて頂き使用して、穏やかに生活できるようにしている。コロナ禍により、面会はLINEビデオ通話かガラス越しでの面会に制限し、外出は自粛していただいている。	コロナ禍で外出や事業、面会を自粛しているが、系列の羽津グループホームや潮彩デイサービスに出かけており、馴染みの人との交流が出来ている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員がすぐに手助けするのではなく、見守り介護を重視して本人が出来ない部分を補い合い、自然に支え合っている。交流を図れない御利用者の方には、その人の嗜好を模索し、快適に過ごせるよう心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	適宜家族に電話をかけ、情報提供を実施し、今後に向けて相談をしやすい環境作りを心掛けている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居前の生活等の基本情報をしっかりとふまえ、御本人や御家族が潜在的に望まれる対応を心がけている。生活の中で行動や表情から意志意向を把握できるよう努めている。	利用者に寄り添い、日常会話から思いや意向を把握するように心掛けている。把握が難しい利用者は行動や表情から意向を読み取るようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に家族や本人からアセスメントを行い生活歴を把握している。また、基本情報により個別対応に重点を置き、ADLの維持向上に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員間の情報伝達を確実に実施し、日々の行動や心身の状態を観察しながら、固有事態や複雑な変化に対応できるようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	部内定例会議やケース会議を開催。各入居者の身体的・日常的課題点を徹底分析し、解決策を話し合う事により統一したケアの実施及び質の向上に繋げている。	管理者兼務のケアマネージャーが担当職員や看護師等の意見を参考に介護計画を作成している。毎月の職員会議の後にモニタリングを実施し、半年に1回介護計画の見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々、個別記録を記入している。記録のデジタル化をはかりクラウド上で保管し、職員は情報を共有している。また、ご家族へも「報告書」を送付し、日常のきめ細かい状況を報告している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	基礎疾患の重症化や高齢化の進展など、医療依存度の増す方には、提携医と連携し、相当するきめ細かい介護を検討し、実践している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	介護相談員など地域のいろいろなボランティアの方々に来て頂き、一緒に楽しい時間を過ごせるように支援しているが、現在はコロナ禍であり停止している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	近隣の医療機関と複数契約し、ご家族やご本人の意向に沿って主治医を決定。原則は御家族による受診同行であるが、希望により通院支援を実施し、必要に応じて往診対応も依頼。クリニックの専門性が活用できるよう、専門医から適切な治療を受診できるよう努めている。	利用者全員が協力医を主治医としており、月1回の訪問診療がある。協力医は24時間対応となっている。必要に応じて協力医の往診対応が出来るようになっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常時入居者の変化や異常について循環看護師へ伝え相談し、連携することでより一層強化されている。記録も共有し看護職のケア内容も介護と共有している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	循環看護の看護師が中心となり、連携・協働で盤石な体制となって動いている。退院時にはスタッフとケアマネが同席し円滑な退院後の生活のため、ケースワーカーや看護師と退院時カンファレンスを持つよう働きかけている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重症化や終末期は、特に家族との連携を密にとり、状況の変化を共有している。終末期には看取り指針に基づく会議を開き、ターミナル介護計画により安寧な終末になるよう心がけている。	終末期及び急変期の対応についての指針があり、契約時に利用者と家族に説明をしている。過去に看取りの経験があり、法人の看護師による支援体制が出来ている。重度化した場合は主治医・看護師と連携を取り、家族と話し合い、情報を共有して支援に取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署によるAEDの講習を受けている。(コロナ禍により停止中) 転倒や誤嚥等の救急時の対応はマニュアルを掲示し、いつでもだれもが対応出来る体制を作っている。オンコールシステムをとっており、急変時の対応をオンコールスタッフが行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災マニュアル・地震・津波時のマニュアルを作成し、定期的に防災避難訓練や消防署と連携した避難訓練を実施し、避難方法を身につけている。近年の大型台風による停電への対策として自家発電機をそなえた。	年に2回、火災・水害・地震等の訓練を実施しており、今年も2回防災訓練を実施する予定である。水・食料等3日分の備蓄をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	運営規定に職員の秘密保持に関する規定があり、職員採用時には同意書に署名・捺印してもらっている。社内研修で言葉遣いなどプライバシー保護の具体的項目について意識の徹底を図っている。また、家庭的な雰囲気を作りながらも、接し方・言葉使いにも重点に指導している。	呼称はさん付けで呼んでいる。トイレ誘導時の声掛けや日常の言葉遣いに気を付け、一人ひとりの人格とプライバシーを尊重する支援を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自身で希望を訴えられる利用者は、その都度時間を取って傾聴するが、そうでない方へは様子の変化に応じて職員から声を掛けるなど、普段から利用者の思いを偏りなく聞き取るよう心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れは決められているが、一人一人の体調や精神面を把握し、その時の本人の希望を尊重して各利用者のペースに沿えるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に理容師の来所支援により、入居者本人の希望に合わせたヘアカットをしている。また、外出時には身だしなみを整えて出かけるよう支援している。(現在、コロナ禍により自粛中)		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	特別昼食や特別デザート等、季節感のある旬なメニューを提供している。また、「おばんざい」などイベント食を提供することで外食気分を味わえ楽しみなものになるよう支援している。	事業所本部の厨房で調理職員が料理を、ご飯と汁物は事業所で作っている。作ってすぐに急速冷凍保存した料理を事業所で解凍し、一つのトレーに温かい料理と冷たい料理に分けて盛り付けをし、保冷温庫から出して利用者に配膳をしている。利用者は特別昼食や特別デザート等を楽しみにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士スタッフによる献立を作成している。摂取記録はその都度記録し、その人に合わせた食事量を提供し、日々個別に水分摂取量を測定している。利用者の咀嚼や嚥下に付いて注意を払い、咽や誤嚥の無いよう摂取できるよう取り組んでいる。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時、就寝前の整容時に歯みがきの声かけをして見守りや介助を実施。昼食後は居室での歯みがきの声かけ、誘導を行い、毎日口腔体操・食前体操を実施している。更に、訪問歯科医と連携し、希望者の方には診療してもらい、治療とケアを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	時間や動きを見ながらトイレ誘導し排泄チェックシートを使用し、排泄パターンを把握することで汚染回数を減らし、トイレでの排泄ができるように支援している。便秘の人には医師と相談し、その人に合った下剤と量で排便ができるよう調節している。	利用者全員がリハビリパンツを使用しており、夜間のみ紙おむつを使用する利用者がある。排泄記録表で一人ひとりの排泄パターンを把握し、声掛けや誘導により排泄支援を行い、トイレで排泄が出来るように支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックシートをつけ、その人の排便習慣を把握するよう心がけている。毎日皆で体操を行い、身体を動かしている。季節に応じ食物繊維の多いメニューやデザートを提供している。服薬による排便コントロールもナースやDr.と連携をとって調節している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	毎日の入浴日で一人ひとりの要望や体調に合わせて、身体状況を把握するように努めている。機械浴を導入し、介護度の高い利用者にも、安全に入浴をしていただいている。また、季節を取り入れ毎月入浴剤を変更し、入浴を楽しめるよう努めている。	週3回、午前中に入浴をしている。毎月、季節に合わせた入浴剤を使用したり、季節を感じる夏みかんの皮を入れた湯やゆず湯等を楽しんでいる。4名の利用者が機械浴を使用している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	医師の指導から、昼食後、午睡をとる事で、生活のパターンを整え心身の休息をはかり、夜の快眠につなげている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局と提携することにより基礎疾患と服用の薬、その副作用について把握している。また、服薬による各入居者の変化を医師・循環看護師に報告することにより、よりよい精神的・身体的状況になるよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居前の生活歴や日常のコミュニケーションの中から、一人一人が得意とされることをみつけ、主役となる場面作りをしている。誕生日会や食事イベント・家族との外出等、各自にあった気分転換の支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	気候の良い時期には、施設周辺を散歩に出かけたり、花見や屋外で足湯などレクリエーションの一環として四季を感じる外出の機会を設けている。また、週2～3回、車でデイサービスや羽津グループホームに出かけ、交流している。	事業所周辺の散歩をしたり、桜・藤・しょうぶ・つつじ等季節の花見、秋は紅葉狩りに出かけている。また、近くの系列の羽津グループホーム、潮彩デイサービスに出かけ交流をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は認知症の進行度合いや家族の意向により、支援方法を変えている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の要望に応じているが、認知症の進行の度合いや、その時々々の精神状態によって支援を変えている。ご家族の意向と入居者の要望を調整して支援している。施設内タブレットを使用し、LINEビデオ通話によるやり取りを実施している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下や共有空間に季節に応じた手作りカレンダーや壁飾り、居心地良く過ごせるような雰囲気づくりをしている。また、各居室・リビングにおける環境整備に行い、快適且つ安全に過ごせるように努めている。	食堂兼居間は天井に換気出来る天窓があり、採光が良く明るいフロアである。有料老人ホームと床続きで中庭があり交流出来る。壁面に手作りカレンダーや季節に応じた利用者の作品が掲示してある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングは利用者の憩いの場となっている。また、中庭テラスや隣接有料老人ホームへの行き来が自由になっていて、交流できるようになっている。デイサービスお休みの利用者と一緒に昼食をとっていただくことで、交流をはかっている		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居されるまで使用されていた馴染みのある家具を置くなどして混乱防止に努め、本人とご家族の好みに応じて居心地良く過ごせる部屋作りをしている。手作りカレンダーやバースデーカードを飾っている。	クーラー・ベット・クローゼット・洗面台が設置してあり、使い慣れた家具を持ち込んでいる利用者がいる。また、写真や利用者の作品が掲示してあったり、整理整頓された広くて明るい居室である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	できないことよりもできることに目を向け、その人がその人らしく過ごせるように寄り添いながら支援するよう努めている。安全優先の観点から窓の一部施錠がある。		